

主 題：十分だったキリストの御業

聖書箇所：コロサイ人への手紙 2章11-12節

テーマ：キリストのみわざがいかに私たちにとって十分なものであったのか？

私たちはきょうから、コロサイ人への手紙2：11-15のみことばを考えていきたいと思います。本当であればここは1回でしようと思いましたが、できなかったのが、きょうは11-12節を見たいと思います。その前に、今までのことを思い返すために2：6-15をお読みします。

コロサイ2：6-15

「：6 あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。：7 キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおりの信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。：8 あのむなし、だましごとの哲学によってだれのとりこにもならぬよう、注意しなさい。それは人の言い伝えによるもの、この世の幼稚な教えによるものであって、キリストによるものではありません。：9 キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。：10 そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。：11 キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。：12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。：13 あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなく死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、：14 いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。：15 神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解除してさらしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加えられました。」

さて、内容に入って行く前に、皆さんはこれまで日常生活にあって、実際はそんなに必要でもないのに余分に買って、後で後悔したような経験が恐らく一度はあるでしょう。もちろん買ってしまった理由は、さまざまかもしれません。例えばある人は店員さんに押しに押されて買ってしまい、ある人はとにかく安かったから買ってしまったということもあるでしょう。また何よりいろいろな場面で目にするたくさんの広告に影響を受けて買ってしまうこともあるかもしれません。それもそのはずで、ほんの数十年前までは新聞に挟まれていたり、ラジオやテレビをつければ流れていたような広告が、今はもうそれぞれが手に持っているスマホを触れば、すぐに流れてくるようになっています。ネットやユーチューブを見てもそうです。今は何かを検索すれば、必ずそこに広告が出てきます。そして、いろいろなところでしつこくそういったものを目にする、次第にそれが気になってきて、最後には要らないのに買ってしまふ、そんなこともあるかもしれません。私たちの周りには、実際は要らないのに、何かを買わせようとする、惑わすものがたくさんあふれています。あたかも自分たちが今持っているものでは足りないかのような気にさせて、それ以上の何かを求めるようにとそそのかすものがいろいろなところに存在しているのです。そしてそんな誘惑が実際にあるからこそ、私たちは今持っているもので十分です、今私が持っているもので満足していますと、自分自身に言い聞かせておかないと、いろいろな物に手を出してしまうことがあるかもしれません。今持っているもので十分なのだと思ひ出させる必要が私たちにもあるのです。

これは、別に日常生活に限った話でもありません。私たちの信仰生活においても同じことです。多くのクリスチャンは、自分たちがキリストのうちにいること自体はよく知っています。この方のうちにあ

って、喜びや満足、安心や祝福があるといったことを聖書からよく知っています。でも時にキリストのうちにあるということがどんなにすばらしいことなのかを忘れて、もうすでに必要なすべてを手に行っているにもかかわらず、それ以上の何かを求めたりします。そして、与えられている必要なもの以上の何かを求めるといふ問題、この危険、それがまさに今私たちが学んでいるコロサイの教会が直面していた問題でもありました。これまで私たちはコロサイの教会について、いろいろなことを学んできました。今読んだ6節を見てもわかるように、コロサイの兄弟姉妹たちというのは、確かに主イエス・キリストを自分自身のものとして信じ受け入れた者たちでした。そして彼らはもうすでにキリストにあって、すばらしい歩みをし始めていたのです。だからパウロは6節で「このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい」と言っていました。その道は正しいから、そうやって歩み続けていきなさいと言っていたのです。

でも、そんな正しい歩みをしようとしている教会のうちには、にせ教師が入り込んでいました。彼らは、キリストは不十分な存在だと教えて、人々を惑わそうとしていたのです。いろいろ巧妙な手段を用いて、信仰者をその真理の源であるキリストからできる限り遠ざけようとしていました。正しい道から人々をどうにかしてそらそうとする誘惑や危険、偽りの教えが実際に存在し、間違いなく教会には大きな危険が生じていたのです。だからパウロは6節で、彼にあって続けて歩んで行きなさいと言った後で、先週見た8節で「注意しなさい」と、強く警告していたのです。愛する者たちが正しく歩んで行くときに、危険があるから注意していなさいと、「むなし、だましごとの哲学」によってだまされてはいけませんよと訴えていました。キリストを除いてしまった、本来何にもない空っぽのもの、何の価値もない世の教えや宗教、言い伝えに心を奪われるのではなくて、代わりに満ち満ちたキリストにのみ目を向けていなさいと教えたのです。あなたたちの目を誘惑するものはいっぱいあるけれども、もうあなたたちはキリストで十分なだから、そのキリストの姿を見ていなさいと。そうやって彼はイエス・キリストの十分な満ち満ちたその姿を思い出させていたのです。キリストのうちにこそ、知恵と知識のすべてがあるのです。キリストのうちにこそ、ほかのだれも決して及ぶことのない、すべてにまさる力があるのです。キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形を取って宿り続けているのですと。だからこそ、パウロはそのキリストに目を向けさせました。コロサイの教会にとっても、今の私たちにとっても、このキリストだけで十分であり、この方がすべてでした。

○完全だったキリストのみわざ：キリストのうちに見出す三つの“十分なもの”

パウロはそうやって注意を与えて、キリストの姿を思い出させて終わったわけではありませんでした。11-15節で、パウロはキリストの姿だけではなくて、キリストにあって成し遂げられたみわざに今度は焦点をしぼるのです。キリストが十分なだけではなく、そのキリストが成し遂げたもの、キリストにあるものが同じく十分であるということを中心に三つ挙げてくれていました。キリストが成し遂げたみわざがいかに私たちすべての信仰者にとって、十分なものであるかを思い出させていたのです。私たちにとってもキリストが十分なのだという確信を増し加え続けることは、とても大切です。いろいろな誘惑から自分を守ることにつながるのです。どんなものがキリストにあって満足できるのか、どんなものが十分なものなのかを考えてみましょう。

1. 完全な救い 11-12節

キリストのうちに見出される十分なものの一つ目は「救い」でした。キリストが成し遂げた救いのみわざは確かに完全なものだったのです。完全であるからこそ、十分なものであるからこそ、何かをそれにつけ足す必要はいっさいありませんでした、11節からパウロが「:11 キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。:12 あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。」と記しています。パウロはここで特に「割

礼」と「バプテスマ」という二つの比喩的表現を用いていました。この二つのことばを用いて、パウロはキリストにある救いの十分性について教えようとしていました。特にこの「割礼」ということばは、いろいろなところで見るとはありますけれども、余りなじみがないから何のことだろうと思うかもしれません。特に私たちの救いにいったい何の関係があるのかと思うかもしれません。でも、この「割礼」にしても、「バプテスマ」にしても、二つのことばは明白に、主がもたらしてくれた救いのすばらしさをここで教えてくれていました。では、いったいどういうことなのか、少し考えてみましょう。

1) 「割礼」

この割礼というのは、いつ始まったのでしょうか？割礼の始まりは、アブラハムと神様との間に結ばれた約束にありました。神様のご自身とアブラハム、アブラハムに続くその子孫との間に立てた契約のしるしとして割礼を受けることを求めていたのです。創世記17章で、アブラムが99歳になったときに主が現れて、契約を結んでいる様子を見ることができます。その中9-11節にこんなことばが記されていました。「:9 ついで、神はアブラハムに仰せられた。「あなたは、あなたの後のあなたの子孫とともに、代々にわたり、わたしの契約を守らなければならない。:10 次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中のすべての男子は割礼を受けなさい。:11 あなたがたは、あなたがたの包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたの間の契約のしるしである。」と。アブラハムと神様、そしてアブラハムの子孫は神様と契約を結んでいました。そしてその契約のしるしとして、象徴として割礼を受けなさいというのが、神様からの命令だったのです。ですから、割礼というのは、そもそも簡潔に言えば、神様がアブラハムとその子孫との間に結ばれた契約のしるしでした。もっと言うのであれば、ユダヤ人たち、イスラエルの民たちを特別に選ばれたことの約束のしるしだったのです。ですから、みずから手でなす割礼というものは、彼らにとって自分たちが神様によって祝福され、ほかの国から切り離された主の民なのだということを思い起こさせる象徴、しるしだったのです。それが始まりでした。

でも時代とともにそれが変わりました。ユダヤ人たちは、そういった割礼をねじ曲げていったのです。ここに問題がありました。彼らはその約束のしるしであった割礼を、勝手に救いに欠かせないものだと考えるようになったのです。割礼を受けなければ、救いはないという間違った教え、間違った習慣を教え始めました。そして、そんな割礼を受けている自分たちと、受けていないそれ以外の人たちを区別して、無割礼の人たちを「汚れた者たち」、「汚れている」と言って忌み嫌うようになっていったのです。要するに、イスラエルの人たちというのは祝福のしるしを、人々と自分たちを隔てる仕切りとして考えるようになりました。人の手による割礼という行いを、救いへと加えたのです。そしてそれだけではなく、人々にそれを押しつけました。当然、ユダヤ人と異邦人との間には大きな壁ができるようになるのです。そして悲しいことに、そんな間違った考えは、この当時の教会の中にも入り込んで、深刻な問題を引き起こしていたのです。その様子は、いろいろな聖書箇所で見取することができます。例えば使徒の働き15:1-2に「:1 さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。:2 そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので」とありました。彼らはモーセの慣習に従って、割礼を受けないと救われないと教えていたのです。キリストだけでは不十分で、割礼が要りますと。同じことは、15:5にもあります。「しかし、パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである」と言った。」と。パリサイ派の者で信者になった人たちが、異邦人にも割礼を受けさせないといけなく、モーセの律法を守ることを命じないといけなくと言っていたのです。つまりここからもキリストだけでは不十分だという考えを読み取ることができるのです。救われるためには、実際に人の手によって割礼を受けなければいけないという教えは、人々の間に確実に存在していました。

こうして伝統や慣習が救いには必要だという偽りの教えは、間違いなく広まっていたのです。コロサイの教会の中に入り込んできたにせ教師の中には、同じようにキリストに加えて、割礼を受ける必要性を訴えていた者たちもいたのでしょう。でも覚えておいてほしいのは、人の手による割礼は、そもそも人に救いを与えることができるものだったのかということです。割礼の最初の目的は、人に救いをもたらすものではなくて、ただ神様とアブラハム、神様とアブラハムの子孫であるユダヤ人、イスラエルの間に結ばれた契約のしるし、象徴だったのです。ですから、救いをもたらすものでは全然ありませんでした。こうしてキリストのものではない、この世の言い伝え、この世の慣習といったものが確かにキリストに何かをつけ加えようとする働きをしましたが、そういったものやユダヤ人たちが言っていた人の手による割礼は、むなししい無価値なものだったのです。

◎キリストの割礼

同時に、パウロはここで救いをもたらすことのできる真の割礼についても口にしています。11節に「キリストにあって、あなたがたは人の手によらない割礼を受けました。肉のからだを脱ぎ捨て、キリストの割礼を受けたのです。」と書いていました。パウロはコロサイの信仰者たちは、「人の手によらない割礼」、「キリストの割礼」を受けたと言っていました。ユダヤ人たちが言っていた、人の手による割礼の話をしているのではありません。キリストにある者たちはみな人の手によらない割礼、言いかえれば、神様による霊的な割礼、心の割礼というものを受けているのだと言うのです。それが具体的にどんなことなのか、そのヒントになることばが11節の途中に「肉のからだを脱ぎ捨て」と出ていました。少し分離させますけれども、ここで使われていた「肉のからだ」ということばは、文字どおり私たちの実際のからだを表しているのではありません。もしこれが自分の肉のからだのことを言っているのであれば、自分の「肉のからだを脱ぎ捨て」というのは、全く意味のわからない表現になるのです。そうではなくて、この「肉のからだ」というのは、その人が持っている罪の性質を表しています。生まれながらの人間は、創造主なる神様に逆らい、自分の思いのままに生きていこうとする汚れた罪深い性質をもともと持っているのです。

そして、そのからだを「脱ぎ捨て」と書いてありました。このことばにはもともと何かを「はぎ取る」とか、何かから何か「完全に分離する」という意味があります。そして、こういった意味に加えて、例えば「衣服を脱ぐ」という意味でも用いられます。例えば一日中、外で仕事をした人たちの衣服はほこりや汗で汚れてしまいます。ではもしある人が生まれてからずっと同じ服を着続けていたとしたら、言うまでもなく、とてつもないにおいがして、ひどい汚れがついているでしょう。今すぐにでもそれを脱ぎ捨てて、新しい服を着る必要があるのです。ここで言われているのも同じことでした。考えてみてください。生まれながらの人間はみんな罪によって汚れています。すべての人が罪を持って生まれてくるからこそ、その心は罪によって墮落して、そして神様やその聖さを追い求めようともしません。むしろ自分の意思で神様に逆らい続けているのです。でも、そういった者がキリストによって救われたら、その者は、ただ神様の恵みによって罪に汚れた古いからだを脱ぎ捨てて、新しいからだを着る者へと造り変えられるのです。その人のうちに働く神様が心を取りかえて、新しいものへと造り変えてくださるのです。汚れたその罪の性質を、神様が私たちから取り除いてくださるのです。

この真理に関しては、別のみことばもいろいろな箇所では教えていました。新約聖書だけではありません。旧約聖書の中にもこんなことばが載っています。エゼキエル36:26-27に「:26 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。:27 わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行わせる。」とあります。それだけではなく、例えば新約聖書ローマ6:6にも「私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだを滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。」と書いていました。またⅡコリント5:17に

は「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」と書いていました。もちろん古いものが脱ぎ去られて、新しいものへと造り変えられるということは、当然人の手によるものではありませんでした。私たち自身がどんなに頑張ってもできないことを、ほかのだれでもない神様が成し遂げてくださったのです。罪に罪を重ねて、自分にはどうすることもできなかったこの肉のからだを、私たちはキリストの割礼を通して脱ぎ捨てたのです。これはすべて人の行いや努力でも、人の慣習でもありませんでした。ただ、恵みのみわざでした。

ユダヤ人の割礼というのは、からだの一部を切り離すことでした。切り去って、それをもってしるしとしたのです。キリストにある割礼というのは、霊的な意味で私たちの心が持っていた罪の性質がすべて脱ぎ去られ、そして新しいものへと変えられることを表しているのです。そしてキリストにあって造り変えられ、古い生き方を脱ぎ捨てた者たちは、かつての生き方を離れて、キリストとのみわざを誇りとする主を礼拝する者として完全に変わられました。だからパウロはそういった者たちこそ、真に割礼の者だと述べていました。ピリピ3：2-3に「：2 ……肉体だけの割礼の者に気をつけてください。：3 神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。」と書いてありました。肉の割礼には決して救いをもたらすことはできませんでした。元からそんなものではなかったのです。でも、キリストの割礼は違いました。キリストの割礼は私たちのうちに働いて、私たちの古い罪の性質を脱ぎ去り、新しいものへと変えてくださったのです。これが、キリストが成し遂げてくださった救いでした。私たちがしたものではありません。キリストにあって、それが成し遂げられたのです。

2) 「バプテスマ」

でもそれだけがパウロがここで言いたかったことではありませんでした。パウロは割礼に加えて、今度は12節でバプテスマということばを出していました。勘違いしてほしくないことは、ここでパウロが口にしたバプテスマというのは、今の私たちが行う水のバプテスマのことを表していたのではないということです。パウロは、水のバプテスマというものが救いをもたらすことができますという話をしていたわけではありませんでした。皆さんは、それはわかっていますと言うかもしれませんが、実際にある人たちは、この箇所を取って、水に浸るバプテスマが人々を救いへと至らせると考えているのです。でもそれは大きな間違いでした。この箇所がそんなことを言わんとしていたのではなかったのです。文脈を考えてみてもそう言えます。コロサイの中でパウロは、ひたすらにキリストだけで十分ですと言っていたのです。そんなパウロがここでいきなりキリストに加えてバプテスマを受ける行為というものが救いに必要だと教えるのは当然あり得ないのです。ですから、この箇所でパウロが言ったバプテスマというのが表していたのは、今見た割礼と同じでした。割礼というものを考えたときに、パウロは肉体的な話ではなくて、霊的な話をしていました。このバプテスマというのも救われた者たちの内側に起こる霊的な働きを描いていました。実際に行う水のバプテスマではなく、キリストによって救われた者たちのうちに働く聖霊なる神様の働きをパウロはここで描いていたのです。

◎御霊のバプテスマ

同じこのバプテスマということばは、御霊によって受けるバプテスマ、御霊のバプテスマとされています。Iコリント12：13に「なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。」と書いてありました。私たちが救われたのは人の慣習でも、もちろん割礼でもなければ、水のバプテスマを通してでもありません。キリストにあって一つの御霊によって、そのバプテスマを通してでした。また、このバプテスマに関して、もう一度12節を見てください。12節でパウロは「あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、また、キリストを死者の中からよみがえらせた神の力を信じる信仰によって、キリストとともによみがえらされたのです。」と書いていました。同じことば

が使われていました。「……キリストとともに葬られ……キリストとともによみがえらされたのです」とパウロは言っていました。コロサイの信仰者たちが救われたとき、彼らのうちにはそのような葬りとよみがえりが確かに起こっていたとパウロは言うのです。

具体的にどういうことなのかと言うと、イエス・キリストは確かに十字架にかかって死なれたお方です。今から約2000年前、あのゴルゴダの丘にあって、この方はご自身の血を流されました。そして墓に葬られ、そして死んで終わりではなくて、その後、死に勝利して3日目によみがえったのです。コロサイの信仰者たちも、もっと言えば今を生きている私たちひとりひとりも、この場所に実際に直接居合わせたわけではありません。でもこの方を信じる者は、この方によって救われる者たちは、だれであれ霊的にこのキリストと同じように、あの十字架にかかって死に、葬られ、そしてよみがえったということを表しているのです。かつて神様に逆らい、自分自身のために生きていた古い自分は、もうすでに十字架の上でキリストとともに死に、葬られました。それだけではなく、そうやって古い自分が死んだ者たちは、新しい自分として神様のために生きる新しい自分として、キリストとともによみがえったのです。それが救われた者たちのうちに、神様によって起こされる事実でした。

今のでわかり辛いと言う人もいるかもしれませんが、パウロは別の箇所でこんなふうに教えてくれています。ローマ書6章から幾つか見ていこうと思います。ローマ6：3-4に、「バプテスマ」や「葬られ」、「よみがえる」という、さっきと同じことばが使われていました。「:3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」と、パウロは言っていました。何が起きているのか、はっきりと描いてくれています。キリストを信じて救われた者たちは、キリストの死にあずかるバプテスマを受けました。そしてキリストとともに一度葬られたのです。かつて罪の奴隷として生きていたときは、自分の肉と欲の中を歩み続けていて、罪と死に支配され、ただ真っ直ぐ永遠の滅びへと向かい続けていたのです。でも、そんな罪の奴隷としての古い自分はキリストとともに、あの十字架で死んだのです。そして死んで終わりではありません。イエス様も死んで終わりではありませんでした。イエス様は死んで葬られた後、3日目によみがえったのです。同じように、救われた者たちは古い自分が死んで葬られ、新しい歩みをする者へと、新しいいのちを受けた者として、キリストとともによみがえったと言うのです。キリストとともに十字架につけられた者たちは、その罪のからだに死に、罪から解放され、キリストとともに生きる者へと変えられたと言うのです。それがすべての信仰者のうちに、神様が起こしてくれたすばらしいみわざでした。

もちろん、こうして私たちが罪から解放されるとか、罪の奴隷ではなくなったということばを見ると、これは信仰者がこの先全く罪を犯さなくなるということではありません。残念ながら、救われて罪の奴隷から解放された後も、私たちのうちには罪の性質が残っているのです。だから私たちは罪との戦いを日々経験します。その激しい葛藤は、私たちが天に召されるまでか、もしくはキリストが帰って来られるときまで終わることはないのです。すべてのクリスチャンは罪と戦い続けていくのです。パウロもその戦いが実際にあることを知っていましたし、そしてそれが難しいものだということもよくわかっていました。だから続く7：15の中で、彼の葛藤も見て取ることができます。ローマ7：15に「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」と書いていました。また19節には「私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。」と書いています。パウロのうちには、善を行いたいという思いはありました。悪は絶対にしたくないという思いもありました。そういう思いがあるにもかかわらず自分でしたいと思う善を行わないで、かえってしたくない悪を行っているという葛藤を覚えてい

たのです。これが、彼が持っていた正直なあかしでした。あのパウロのことばだったのです。そして覚えておいてください。パウロがこのことばを発したのは、信仰を持って間もない時の話ではありません。彼がローマ人への手紙を記したのは、彼が救われてから少なくとも数十年がたっていました。また、このローマ人への手紙を記すその前には、例えばガラテヤやテサロニケ、コリントといった手紙ももう記していたのです。つまりあれだけみことばの真理を知っていて、キリストに根ざし続けていて、成熟を目指していたパウロでさえ、いつも罪との葛藤を覚え続け、悲しみやみじめさを味わうことがあったということです。救われて戦いが終わったわけではありません。罪の奴隷から解放されたから、あとは自由にしましうではなかったのです。罪との戦いを彼はずっと経験し続けていました。私たちも同じです。救われて罪の支配から解放された後も、いつもキリストのために生きていきたいという願いと、自分のために生きていきたいという願いとの戦いを経験するのです。そして、私たちは自分のために生きていきたいという思いを脱ぎ捨てて、キリストのために生きていきたいという思いを身につけて歩み続けていこうとするのです。

でも同時に、パウロはそんな中にあっても希望を失うことはありませんでした。それは彼がキリストとともに十字架につけられて、新しくよみがえった者たち、新しくされた者たちはもうすでに罪のさばきから解放されていることをわかっていたからでした。キリストのうちにある者たちは、もう罪の赦しが成し遂げられていると聖書は教えているのです。だからパウロは確信を持ってこんなふうに言うことができました。今、見てきた7章の最後24節から「:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。:25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。……8:1 こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」と続いています。これが、私たちが同じく持っている希望でした。確かに私たちは日々の生活の中にあって、罪との葛藤を経験します。でも、私たちはもうその罪が赦されていることは知っているのです。でも赦されているから、知っているからと言って、その罪をほったらかしにすることはしません。神様を愛しているから、神様のように聖くなっていきたいと願うから、罪と戦い続けるのです。私たちは希望を持ちながら、日々葛藤していくのです。キリスト・イエスにある者は、罪の罰からもうすでに解放されました。罪の力というものは、もうその者を支配してはいないのです。罪の奴隷ではもうなくなりました。神様を喜ばせる義の奴隷として、新しく造り変えられて歩んでいくことができるのです。これをもたらしてくれたのは、キリストのみわざだということです。

人の習慣や慣習ではもちろんありませんし、私たちの知恵や力でも当然ありません。私たちは神の力を信じる信仰によって、キリストとともに死んで、キリストとともに葬られ、キリストとともに新しくよみがえった者として生きていくことができる者と変えられたのです。ただ、キリストにあって、私たちは歩みに必要なすべてを手にすることができます。キリストにあって、私たちに何よりも必要な救いを手にすることができます。これが、キリストがもたらしてくれた完全な救いでした。私たちにとってこれが十分なものでした。このキリストのみわざに何かを足す必要はありませんでした。何かを引く必要もありませんでした。ただキリストによって、私たちの古い人は過ぎ去って、私たちは新しくされたのです。だとすると、果たしてそのような真理を本当に知っている者として、それにふさわしい歩みをしているのでしょうか？ 私たちのかつての古い自分は、罪に汚れた自分のために生きていた状態は終わりました。キリストにあるのであれば、私たちはもう新しく造り変えられた者として歩んでいくことができます。果たしてそのような者として歩んでいるのでしょうか？ 私たちのうちで神様が働きをなしてくださったから、私たちがしたことではないから、そのことにいつも感謝を持って、キリストにあって喜びながら歩み続けているのでしょうか？ 絶対に忘れてはいけません。

今コロサイ12節まで見てきましたが、来週見る予定の13節を見ると、キリストを知る前の者たちの姿がこんなふうにはっきりと描かれていました。「あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ

者であったのに」と書いていました。これが私たちの姿でした。死んでいました。死んでいる者は何の希望もないのです。神様の前に逆らい生きていた私たちは、罪の中に死んで、いっさい希望もありませんでした。そんな私たちに新しいいのちが与えられたと言うのです。何度も言いますが、私たち自身がそれをどうにかして手にしたではありません。ただ、キリストの完全な、十分なみわざが私たちを罪の奴隷から解放して、新しく生きていくことができる希望を、いのちを与えてくださったのです。だからこの方のうちにこそ、私たちの救いに必要なすべてがありました。パウロはそのことをコロサイの兄弟姉妹たちに教えていたのです。恐らく割礼やいろいろなことを持ち出してきた人たちがいたのでしょう。でも、そのような人たちに要りません、キリストだけで十分ですと。キリストに必要な救いのすべてがあるという真理を思い出させることによって、危険を取り除こうとしていたのです。

それは私たちも同じです。果たして私たちは、キリスト以外の何かを求め続けて生きていくのでしょうか？この世の教えや伝統、宗教といったものに心を奪われて、人の言い伝えや教えを信頼して生きていくことを選択し続けるのでしょうか？キリスト以外の何かに自分の喜びや満足を見出して歩んでいこうとし続けるのでしょうか？キリストのうちに喜びがあるのに、キリストのうちに満足があるのに、それを要りませんと自分から言って、それ以外のものを求め続けていくのでしょうか？キリストによって新しく造り変えられた者として、キリストを何よりも求めて、このキリストのみことばである聖書を何よりも学び、信頼し、それによって生きていって、キリストに似た聖いものへと変えられていくことを望んでいるのでしょうか？ガラテヤ2：20でパウロは「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」と述べていました。これが彼のあかしでした。キリストにあるパウロの人生は、もう彼のものではなかったのです。以前は確かに彼も神様を汚し、熱心に迫害する者として生きていました。でも、キリストに出会った彼は、すべてが変えられたのです。そして救われたパウロは、ただ自分を愛し、自分のためにご自身を捨ててくださったその方のためにすべてをささげて生きていました。そしてもちろんその選択をした彼の人生には、大きな迫害が、いろいろな痛みや苦しみが伴ったのです。罪との戦いを絶えず経験し続けていました。それでもなおパウロは希望を持って神様と人とを愛して、忠実に仕え続けていたのです。

果たして私たちはどうでしょう？私たちの願いや動機、私たちの歩みのすべては自分中心のままでしょうか？それともキリストを中心とするものへと日に日に変えられ続けているのでしょうか？もしまだこのキリストにある救いを自分のものとされていないという方がいるのであれば、あなたにみことばが求めていることは、このイエス・キリストの前にへりくだって、自分の罪を悔い改めて、この方を自分の救い主として、主として信じ受け入れることです。だれも自分自身を救うことができる者はいません。どれだけ良い行いをしようが、完璧な神様の基準を満たせるような者はいません。みずからを救うことができる人はひとりもないのです。唯一救いを与えることのできるお方がいます。そのイエス・キリストに自分自身の身をゆだねて、そのすべてをささげて、この方のために生きてください。だれにもあしたのことはわかりません。わかっていることはここにいる私たちはみな、必ずこの世界を創造された聖く完全な神様の前に立つ日がやって来るということです。そして、そのときに自分が間違っていたと気づくのは後悔しても遅過ぎます。ですからきょうというこの日に、キリストにある救いをご自分のこととして求めてください。神様は、心碎かれてご自身のもとに来る者に罪の赦しを、救いを与えると約束してくださっています。ですから、この方を信じて、この方のために生きる人生を始めてください。ここにのみあなたの心を本当に満足させる喜びが、救いがあります。

そしてもうすでにこの主を信じておられる皆さん、キリストを愛しておられる兄弟姉妹の皆さん、私たちは覚え続けることです。私たちの愛する主イエス・キリストは完全な救いを、そのみわざのすべてを成し遂げられたお方でした。この方にのみ、私たちの救いに必要なものはすべてありました。この方

のうちにのみ、私たちの満足や喜び、私たちの希望や救いはあるのです。だとすれば、いったいこの方のほかに何を求めるでしょう？十分なキリストをもう私たちのものとしているのであれば、どうしてほかのものを求めようとするのでしょうか？みずからキリストから離れていて、何の希望もなかった私たちを愛し、私たちのためにご自身を捨ててくださったキリストから目をそらさないことです。この十分な主を覚えて、今週も続けて主のために歩んで行きましょう。